

日蝕観測 (昭和18年
二月5日) を終つて (3)

Solar Eclipse of February 5, 1943.

観測部長 木邊成麿 *Sigemuro Kibe.*

6時30分 日出も間近である(地平線からの日出は6時32.9分と計算されて居る)。すっかり明け切つた空を見ると、素晴らしい快晴には違ひないが、東の方低く、約3°位まで、僅かに巻雲が残つて居る。

次に東京天文臺豫報の時刻(厚岸)を示す。

	時刻	地平高度(眞)	
初 虧	6時45分58秒	1° 20'	皆既繼續 1分56秒間
皆 既	7 51 23	11 42	
生 光	7 53 19	12 0	太陽視半徑 16'13."3
復 圓	9 5 20	21 31	月 " 16'37."0(皆既中) 蝕分 1.012

6時40分 遂に東の低い山から、眞赤な太陽が出て來た。気温は-9°C。主鏡には蓋をしたまゝ、案内用の6センチ屈折に25×を使用してサングラスを通じて見る。視野の像は、巻雲の爲めに多少ボケて居り、加へて、極度の低空だから、氣流の影響が大きく、鋸りで切つた様な太陽である。

打合せ通り、初虧の1分前から、半秒讀みの呼稱を開始して貰つて自分が観測する。豫報の60が來ても、鋸切り狀の周縁線のため、接觸が分からない。やつと3~5秒も過ぎて、確かに氣付いた。第一觸の計時としては不出來である。然し、器械も小さければ、又シリングも不良、時計も正式のものではないから、計時は豫定の仕事に入れてはなかつた。従つて観測しても、良心的に記録はしなかつた。單に自分自身の参考に見た迄の事である。

さあ、いよいよ日蝕が始まつたのだ!! 中頓別でも、初虧は自分が見た。其の時同様に、云ひ知れぬ緊張を感じる。其の一面、一寸暫く仕事がないと云つた氣分も混じて、初虧直後は多少不統一な精神状態となる。

7時 恰かも豫定の如く、太陽は巻雲層から離れてしまつた。雨上りの澄んだ空だから、3度も昇ると赤味が大部分とれてしまふ。そして蘭々たる光球と云ひ度いが、今日に限つて、一寸右上肩を月にタカカテ凹んで居る。然し其の他はランランとして居る。やはり太陽である。珍景だ!!

少し器械の三脚の足場が悪いので、雪を堀つて安定をし直す。

7時10分 主鏡の焦點硝子に結ぶ太陽像は、既に三分の一位虧けて來た。とても虧けが早く進む氣がする。學校の先生に見せたりする。氣温が少し上昇して來た様に感ずる。-4°C位である。

7時20分 18分頃に、蝕分は50%に達する。未だ太陽光線の異状には氣付かない。蝕分50%とは云へ面積的に約40%、光量としては30%位の減少にすぎないから感じないのも道理だ。

フト案内鏡を見ると、アイピースの十字線の一方が飛んで居る。先刻、安定の爲めに、器械を移動した際、ウツカリとアイピースを外して置いたので落した事を思ひ出した。速刻、氣の毒だが、山口君に宿舎に置いて來た豫備の接眼レンズを取りに行つて貰ふ事にした。

7時30分 蝕分60% (7時25分) に及んで、どうやら、僅かに空色の變調に氣付く。誰れもが少し變つたと云ふ。其の内に70% (7時32分) にも達すると、一見異状を呈して來た。木立に葉が無いから、手指を揃へて差出すと、其隙間から洩れる光が、背後の幕にボンヤリと三ヶ月型に結像する。後20分の呼稱がかかる頃、“空色が少し異つて來るし、氣が焦つて焦つて”と云ひつつ山口君がアイピースを拂つて來て呉れた。直ちに取換へて見ると、ラムスデン式だから視野が狭い。色も出る。慾の深い話しだが、自分は操作に追はれて肉眼で見る餘裕は豫め考へられない。だから、せめても、案内鏡を通じて見たいと思つて居た。其の爲めには、視野の狭い、且つ色が出るラムスデン式よりも先のケルナー1式の方が遙かに優つて居る。思ひ切つて、折角取りに行つて貰つた山口君には申譯ないが、取換は止めた。短時間で、しかも快晴だから、一本の線でも充分導入の自信はある。又とない機會だ!! 成るべく美しく見たい!

7時40分 (蝕分83%) 蝕分が80%に達する頃から、空色が急に異様の度を増すばかりでなく、地上の景色も變つて來る。此の頃には、太陽周縁部のみの光線となるから、光量も5分の1よりは、遙かに減じ、且つ色も變つて來る。背後の幕に投ずる自分の影を見ると、頭髮が異様に立つて映る。氣温は-5°C、明らかに下降して來た。先づ外套、次いで手袋、帽子等、操作の邪魔になるものは、スツカリ脱ぎ去つてしまつた。

いよいよ皆既も10分餘り後に控へて、一同寂となる。自分は70%を超えてから、太陽の方は向かない事にして居た。最初の部分蝕撮影に備へて、取柁を裝置する。これは部分蝕の撮影と云ふよりも、皆既の時の氣分を落付けるために10分前から撮影する様にしたのである。10分前!! 呼稱に従つて引蓋を引き、バサンと最初のシャッターを切つた。

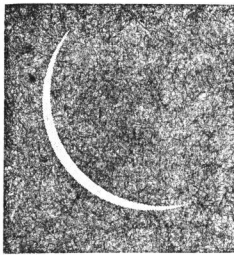
7時45分 (蝕分90%) 第二の露出を行ふ。サングラスを日中用から、銀なしの反射鏡に常用して居る薄手のものに取り換へる。さして眩くない。利鎌の様な

太陽像だ。前回の時は墨硝子を使つて肉眼で見たが、今度は初めてこんな深い蝕の太陽像を、望遠鏡裡に見たのである。

少し手先が冷へて來た。兩手をズボンにつゝ込むでみるが、氣分が焦る。次の露出の爲めに取枠を交換する。寒くなつた様に思ふ。

後5分!! フト目を暮に向けてると、何か少しチラチラとして居る。どうやらシャドウバンドらしいが、無言のまゝで居る。山口君が20メートル許り先で、しきりとライカで狙つて居る。愈々四邊りが暗くなつて來た。4分前!! かすかに風向きの爲めか、1キロも離れて居る東京天文臺班の、告刻の大鼓が、ドドン、ドドンと四つ許り響いて來た様である。

7時48分(蝕分95%) 3分前!! 三枚目のシャッターを切り、取枠を裏返した途端!! 鮮かなシャドウバンドが流れ出した。思はず目を校庭に向ける。流れる! 流れる。巾5センチ位、長さは數十メートルもあろうか、少しユラユラした紐



蝕分96%
(5日7時49分頃)

のような影が、約1メートル位の間隔を置いて、自分の左から右へと(大體北より南へ)とても早く(秒速10メートル位もあろうか)次から次へと、たぐり出される様に目前を走り去る! 此の前に見たのよりも、波目が荒くて、しかも流れが早い。其上、地表が積雪で眞白な爲めか、明暗が鮮かだ!! 實に美事なシャドウ・バンドである。太陽高度の低い今回に、よもや、かくも明瞭に見られるとは思つて居なかつた。念のために、山口氏の撮影の注意を促すべく、“シャドウ・バンド”と叫ぶ。後刻に聞いた所に依ると、僕がかう叫んだのは、2分前の呼稱前後だつたそうである。實際、前回も同様に、此のシャドウ・バンドの流れ出した瞬間ほど凄愴な感じのするものはない。自分にとつては、皆既になつた瞬間以上とさへ云ひたい。何んだか、ゴルドと天地にとどろく大音響と共に月の影が間近かに押し迫つて來る様な氣がして、ゾーとして來る。實に、すばらしくも迫力を持つて居るものだ。

1分前!! 2分前を最高潮に、四邊りの暗さが増すにつれて、逆にシャドウ・バンドは、漸次見難くなつて行つた様である。それは白い部分が暗くなるからだらう。未だ1分前にも見へて居たそうであるが、最終部分蝕に備へて、山口君は18センチ機の側へ駆けつけて來て呉れた。氣温-7°C。

30秒!! 引蓋を引く。自分はサングラスを通じて太陽を見る。蝕分99%を過ぎては、太陽は線状である。而も、兩端は切れて、少し短かい。フト西縁を見ると、何んとボンヤリしたものが、薄手とは云へサングラスを通じて見へて居る。多少驚いたが、明かにコロナである。皆既にならなくともコロナは確かに

見へるものだ。少くとも内部コロナは確實である。大切な仕事を捨て、自分は直接肉眼で見なかつたから、確言は出来ないが、後になつて、色々尋ねた所を総合すると、大體99%を超へると内部コロナが見へ、更に皆既の前後數秒位では(蝕分99.8位)、外部コロナの伸びすらも見得るものであるらしい。

20秒!! 15秒!! 未だ細線が切れて來ない。

10秒!! 月が切れたか? “よし”と云つた。山口君がシャッターを切る。果してベリイスピードにまで來て居たか自信はない。直ちに、目を手に持つて見て居たサングラスと共に、アイピースより外し、引蓋を閉ぢて、取枠を外した時、筒先のシャッターを山口君に目くばせした取換へて貰ふ。鳥がガアガアと數十百羽啼き立つた。急に暗くなつたらしい。

皆既!! 焦點直前のフィルタを取り外した。五番の取枠を受取つて、装置した。氣が付くと、早や時計係りの聲は、十數秒目を讀んで居る。一刻の猶豫も許されない。空を見るよりも、直ちに案内鏡を覗き込む。

正に初めて見る、レンズを通した皆既の姿である。黒灰色のやゝウスボケた色合をした月の背後に、芒乎たる白色のコロナが、極めて輕快に、微かに流線を伴つて吹き流れた様な恰好を見せて居る。其の尖端は視野以上延びて居る。月の周縁を取り巻く内部コロナは強く明るい。貧弱な淡紅色(眞紅ではない)のプロミネンスが、其の中に二三ヶ所くっついて居る。視野の中は全體として軽く紫色を帯びて居る。期待した内部コロナの緑色は氣付かない。淡紫色、淡白色、淡紅色、そして淡灰色、これが視野の中の風景の色合である。いづれも淡々たる色合をして居る。そして非常に靜的な、清楚な感じがする。美しいには美しいが、思つた程には美しくない。何んとなく現實から遊離した様な、所謂影像的な感じを免れない。迫力がない。眠つて居る様だ!!

然し、こうした光景を長く見る餘裕はない。自分は視野の中に影像を導入すれば、直ちに目を離さねばならない。そして又、正に其の通り、僅か二三秒間、其の目的のために見ただけである。其の時の感じが、今述べた通りなのであつた。目も手も一應器械から離して、筒先のシャッターを見つめる。震動が萬一器械に残つて居てはいけな。二三呼吸ばかり待つた。其の間に思はずチラリと目を太陽の方に向けた。其の瞬間“はゝん、やつて居るね”と云つた感じがした。太陽が(月の事は餘り感じられない)滅多に見せない御家藝を、今し、豫定の如く演出して居る。當然の事であるにもかかわらず、感心した様な氣分となる。が、其れにも増して、見よ其の壯麗さを!! コロナは左右に(大體東西一赤道方向に)太陽(月)視直徑の各二倍づゝ以上にも流れ延びて居る。右手の方は二本に大きく分かれて居る。純白な、しかもすき透つた様な色だ!! 中の月は灰色位に感ずる。空は紫色と鉛色を混じた様な色合だ!! 地上の雪も紫

色だ!! 前回、中傾別で見た空は、青黒い色をして居るが、今度は紫が強い。四邊は暗いとは云へ、望遠鏡の操作には何等不便を感じない程度である。先づ日没後半時間位のものだろうか。其れにしても、其の華麗な光景は、正に天下第一である。單にコロナや空色だけではない。又、夜の世界でもない。日蝕と云ふ現象から受ける感じは、地上の風景や、風の聲、鳥の啼き聲、時計係の呼刻、シャッターの音、自分の息づかひ、何もかもが、渾然一體となつて、或る面では壯麗に、又ある點では、森嚴に、又清楚に、簡素に、巧緻に、寂然と、而も生き生きと、どう形容して好いか、全く語り記るす事は出来ない景觀である。あゝこれだこれだ!! 正に本當の日蝕とはこれだ!! 望遠鏡を通じて今先に見たのは、日蝕には違ひないが、肉眼で見たものに比べると、眠つた様な日蝕でしかない。まして、寫眞になつてしまへば死的な一とさへ云はれても仕方がない。

此の様な事も、實はほんの數秒に受けた感じである。西も、現實には、寫眞撮影に一生懸命な自分なのである。然し、其の時、別に矛盾は感じなかつた。其れは只今とても同様である。

さて、ほんの數秒位、目を太陽に向けた自分は、もう其れ以上の餘裕を持ち合せて居なかつた。慎重に、皆既蝕第一枚目の露出を與へる。引蓋を閉ぢ、取枠を背後の先生に渡して、代りを受取る。裝置して、引蓋を引く。一寸案内鏡に目を當てて、導入を確かめる。今度はズッと筒先を見たまゝ、第二回の露出にシャッターを引く。再び操作を繰り返して、皆既中央時刻に第三枚目。露出終つた時に、呼刻は丁度60秒であつた。其の頃一陣の急風が立つ。一寸舌打ちをする。再びチラリと太陽の方を見た。やはり美しい。が然し、風に氣を取られてこの時には別に感情は湧いて來なかつた。人間で勝手な者だ。器械の動搖に氣を付けて、90秒に一枚、更に第五枚目の露出を終つた時に、もう110秒に達した。風のために、豫備の乾板を使用する事は出來なかつたが、豫定の五枚は撮したから、多少ホツとした氣がした。

ダイヤモンドリング 速刻、引蓋を閉ぢて、取外さずに、今度こそ意識して、太陽の方を向く。コロナが美しいと思ふ暇もあらばこそ、既に熱した様に見へて居る左上肩が、ピカリ!!と光つた。内部コロナが美しく輪となつて、所謂ダイヤモンドリングの壯觀である。此の時、外部コロナが如何様に消へて行つたかは、遺憾乍ら記憶して居ない。たゞ、ダイヤモンド部分が次第に大きく、コロナ部分が次第に細くなりつつも、所謂ダイヤモンドリングの見へて居る時間は十數秒間もあつた。山口君も、學校の先生との撮影のために、再び此の間にあつて愈のため“ダイヤモンドリング”と呼んで見る。

生光後 嗚呼!! 待望の皆既日蝕は終つた。十數年來の待望の此の皆既日蝕は永久にこれで終りだ。たゞ、今となつては、強い殘像としてのみあるのだ。や

がて、焼付けられて、記憶と云ふ倉庫へ抛り込まれてしまふ。何んだか、ボンやりと數十秒経過した。生光後の1分目は既に過ぎた。98%の蝕分なんか、撮しても面白くない事は、皆既前サングラスを通じて見た所である。

我にかへつて、先づ手をズボンに手をつゝ込んで見た。流石に手袋なしに、數分居ては、寒氣のために痛さを覺へた。氣温はと尋ねると -8°C だと云ふ。皆既前より $2^{\circ}\sim 3^{\circ}\text{C}$ 位降つた。このまゝにしても仕方がないと、急に思ひ出した様に、残つた乾板で、深い食分を四枚續けさまに55分から59分にかけて撮影してしまふ。(蝕分97%~92%)

すつかり撮し終つて、今となつては一番大切な取枠を、全部揃へて、丁寧に黒布で包んだ。もう蝕分90%弱に戻つた。焦點硝子に太陽線を映出させて見る。見る々々太陽が太つて来る。其の時太陽を見て、急に一寸憎らしく感じた。あの美しい光景を、たつたあれだけしか見せず逃げて行く様に思はれたからである。途端に、急に今迄の仕事が心配になり出した。果して操作に失敗はなかつたか? 實際何をして見たか、自分がどんな様子をして居たか全然覺へて居ない。

生光後にもシャドウバンドは見られたそうである。而も、流れの方向が逆であつたそうだが、自分は氣付かなかつた。實際90%位まで戻ると、皆既前の同様な蝕分よりは餘程明るく感ずる。目が急に明るい所へ出るから所謂感ずるのである。然し、シャドウバンド、は氣を付けられないのか、見難いのか即斷はし兼ねる。8時6分、蝕分は80%に戻る。空色も殆んど復したかの如くに感ずる。輻射もハッキリ増して來た。氣温も早や -6°C に上昇した。隣りの先生が、皆既中に星を天頂と、西の方に見たと云つて居るのを聞く。恐らく、ヴェガとアークトウラスだらう。8時10分頃、とにかく、自分だけ、大切な取枠の包みを抱へ乍ら(果して操作に誤りがなかつたかと、氣にし乍ら)、トポトポと宿舍に引揚げてしまつた。其してぼんやりとして、暖かいストーブに手を翳して居た。實にいい天氣である。窓外の様子は、未だ三分の二も缺けた太陽の光りとは思はれない。

復圓 二三の電報を打つて、8時55分再び観測地點に行く。すつと待つて居て呉れた山口君に“よく晴れたね、しかしどうも自分のやつた事が心配で”と云ふと“いや、私も皆既中に、多少氣懸りなので器械の方を見ると、落付いて操作されて居た様に見受けたから大丈夫ですよ”と云つて呉れたので多少は安心したもの、やはり“そうだつたかな”と思ひつづける。

其の内に復圓も追つて來た。其の頃、先生は二三人しか残つて居なかつたので、今後は自分が時計係りを引き受ける事にした。6センチの直視を山口君に、焦點硝子の影像で先生が夫々計測した。豫定より多少早かつた様に感じたが、

初虧同様に、我々のみの参考にとどめる。これで完全に日蝕も終つた。約2時間20分、早く時間が経つたかを感じる。太陽も高く、而も今こそ爛々たる光球は白銀の世界を眩くも照して居る。気温は -3°C 位、空は依然快晴!! あの一時間前の光景はどこを探しても見當らない。實に平穩な北邊の冬である。教員室で、校長以下の先生に、今日の勞を謝して、自分は望遠鏡を三脚のまゝ肩に擔いで引揚げて行つた。

10時過ぎ、東京天文臺へスキーを覆いて登つて行つた。皆御機嫌だ。然し、我々天文仲間では、仕事に關しては話さないものである。たゞ、犬が吠へたとか、鳥が喧しかつたと、他愛もない事だけ話合ふ。一番の餘興は、水野さんのスキー初乗りと云つた所であつた。

午後 14時頃から雲が湧いて來た。疲れた自分は、ストーブの側で一寸居眠りした。夕食後、關口博士來宅され、小一時間も、よもやまのお話しをした。先生も今日の天気には満足されたらしい。紙片に數句を認めて下さつた。“雪晴れを阿寒の裾の征鼓”は、あのドドンと響びひた皆既直前を髣髴とさせるものがある。

其の夜は、一部の感光板を再び箱に納めて、22時寝る。

2月6日 晴後曇。明けて今日も、又素晴らしい天気である。 -14°C 昨日以上かも知れない。厚岸へ來て以來、最も気温の降つた朝であつた。初めて灣内の海岸が氷結したのを見た。終日器械の解體や、荷物の整理をして、18時30分幸せな思出の厚岸を後にして、歸路につく。トランクには大切な玉手箱を秘めて。

歸着迄 6日夜は釧路に一泊、今度の觀測に際して、危禍に災された百濟先生を病院に見舞つた後、高城、西村兩君と好晴を慶祝する。0時頃まで話し込んで寝む。翌朝東京の五藤齊三さん夫妻に、宿で出合つて、早速に現像、焼付された一部を見せて貰ふ。意外な暖氣に、雨さへ降る中を、7日9時釧路發、車中へ、態々、池田驛長の佐々木さんが尋ねて來て呉れた。前回は中頓別で日蝕を見た入である。其の時は、やはり皆既帯中の音威子府の驛長だつたのが、轉任した先で又日蝕に出會つたと云ふ事である。7年前の舊談に懐かしい思ひをし乍らあの時に一緒に日蝕を觀測した、東京、京都、チエッコ班等十數名中、今再び日蝕觀測に來た者が、或は自分一人かと思ふと、多少の感慨を禁じ得なかつた。車窓は雨が降りしきる。大平洋の波も今日は正に荒く、濁つてゐる。かくて旭川を経て、10日16時、無事に歸省した事を記して紀行を閉ぢる。

4. 簡単な結果報告

現像 正式の報告は、いづれ原板の測定を待たねばならない。今は未だ其の仕事は終つて居ない。従つて、謂はゞ日蝕を通じた感想と云つたもので結んで

置く。現像は歸省即日比較光を入れ終つて、(この點批判餘地が多分にあるが) 13日から、ぼつりぼつりと、先づ部分蝕から開始した。結局三色フィルムを最後に、25日に終了したのである。

成績 單に現像ただけの様子から云つて、重點的には大體自分の行つた分は良好であつた。先づ、皆既板から云へば、普通乾板に依るものは、豫期以上の點があつた。二枚の處法を夫々異にしたが、皆既中央の分は、f20位と云ふ暗い口径比で、しかも、半秒強の露出でも、内部コロナは勿論、外部コロナも視野以上に感光して居た。(現像押1)生光前のものは、プロミネンスと廣汎な彩層圈が撮影出來て居た。三色フィルムに依るものは残念乍ら、コロナには多少露出不足であつた。f20の焦點比では1秒半の露出が欲しい。然し其れは自分の器械としては出來ない相談であつた。其れで居てプロミネンスは過度になつて居る。幸ひ、心配した器械の風による震動、又は操作上の失敗はなく、且つ、日週運動による像の流れも、殆んど出て居ない。次に、部分蝕は皆既前のは良好。但し、ベリスビッドは、時刻が多少早すぎたのと、加へて露出不足で先づ出來てあつた。プロセスよりも普通のスピードの乾板を使用するか、又はフィルタIを外して置くべきであつた。今度は月の比較的滑かな部分に相當して居たと云へ、f70位の焦點比なれば(絞り4センチ)フィルタI無しで $\frac{1}{50}$ 秒位のシャッターを切つても、感光面が反轉する心配は無いらしい。(プロセス乾板と極端な太陽周線部であるから)皆既後のものは一部不良であつた。焦點距離13.5センチの手提カメラに依つて、國民學校の先生に依頼した分は、色々の理由で全部出來に終つたが、本來の目的でないから惜しくない、山口氏のライカはf2の開放を利用して、シャドウバンドの撮影を主目的としたが、f2でも光量上不足した。何分流れが早く、 $\frac{1}{200}$ 秒以下のシャッターは切れない。加へて、明暗も鮮かとは云へ、要は日當りにロウソクを立てた時に生ずる陽炎の濃淡程度であり、而も95%以上缺けた太陽の光りは白晝の1%もあるか無い位のものだらう。其して、今回は雪の堆積を利用したが、もつと、廣い面積を狙ふ必要がある。白布を擴げた位のものでは今後も到底撮影は困難だらう。場所柄、思ひ切つて地上景色を撮影する事が許されなかつた事は己むを得ないとしても、今回の様な白雪中のシャドウバンドは、廣い地表を狙ふには好適であつた。自分として、もう少しシャドウバンドを重要な計畫中に入れて、充分考へて置けば良かったと思つて居る。

結び コロナの寫眞は、容易である。但し、内部と外部の著しい光量の差は空の被りと共に難題である。外部の伸張を出せば、内部は全く駄目となる。ハレーション防止のバックング程度では防ぎ切れない。單に撮影するためにはf10以上明るいものは必要でない。明るい焦點比で長露出をかけても、空の被りと

内部コロナのハレーションが加はつて、結局同じ様な事になる。f100, 1秒間で撮れるものは大體撮れてしまふ。むしろ自分が今度は最初から、内部コロナを狙つたのは、寫眞としては効果的であつた。ハレーションも、一見した所存在しない(但しこれは一見しただけの事である)。又フィルタ1は測定目的の外は利用しても駄目である。空には感じなくなるが、同時に外部コロナも又撮らなくなる。赤外線では特に著るしい。いづれにせよ、一概にコロナとは云つても場所に依つて、甚だしく明暗に差があり、其れが現在の乾板の許容範圍を遙かに超へて居る事に留意すべきである。否これは、測定に際しても、充分に考慮して置かねばならない。日蝕に餘り慾張つてはいけない。自分が、三色フィルムに惚れ込んで、充分な試験をせずを使用した事などは其の例である。ましてコロナとプロミネンスの色合を、同時に下さうとするには、未だ感光材料の進歩が必要である。其して最後につけ加へて云つて置き度い。日蝕に行つた以上あの生き生きとした壯觀をば、肉眼で見る事を決して忘れてはいけない。寫眞とはスツカリ異つて居る。自分は、其の感じを出来るだけ正確に記録すべく、努力したのであるが、結果はやはり今迄通りのものしか出来なかつた。肉眼の光量に對する順應力はすばらしく豊かである。天與の武器だ!!特殊の測定に、寫眞は不可缺のものではある。これは否定しない。然し、仲介を経ずに、この天與の武器に依つて、皆既日蝕を觀る事に、人間として、何の恥すべき事があるろうか! 少くとも、天文愛好者にとつては!!

— 完 —

七夕星を詠める

七夕はよもさはあらじすばり星	宗 鑑
はなれがたし星に七夕牛に蠅	常 矩
七夕やはだか硯の俄族	芭 蕉
七夕や秋をさだむるはじめての夜	〃
二星恨む隣の娘年十五	其 角
めでたさや星の一夜も葬も	素 堂
肌さむきはじめや星の別れより	乙 由
七夕にかしく身果や竹婦人	〃
田の水の湯と成て星の逢夜哉	鬼 貫
星さまのさゝやき給ふけしきかな	一 茶